

「Terminal 288」（ターミナル・ツー・エイト・エイト）

作…高橋祐紀乃

登場人物

澤村咲希（さわむらさき）	女	会社員
凧谷波留哉（なぎやはるや）	男	咲希の部署の課長の同期
相原美園（あいはらみその）	女	転勤してきた咲希の同期
内田悠介（うちだゆうすけ）	男	入社したばかりの新人
徳井菜菜実（とくいまなみ）	女	咲希の部署の課長
越智武志（おちたけし）	男	咲希の同期で同僚
谷明日香（たにあすか）	女	咲希の元同期で親友
大野広（おおのひろし）	男	刑事
笹井優里（ささいゆり）	女	刑事
笠原安喜良（かさほらあきら）	男	マスター

回想シーン

葉橋純（はばしじゅん）	男（女でもよい。）	刑事
桑原円（くわはらまどか）	女（男でもよい。）	店員

☆徳井課長は徳井邦雄（男）として上演することも可能です。

ある会社の営業所の総務部。
デスクと椅子が3セット。

1セットは少し離れた場所にあり、ノートパソコンがおいてある。

2セットは向かい合わせで、1セットには開いたノートパソコンがあり、澤村が座っている。

明転。(照明①)

澤村、キーボードを叩いていたが、手を止めて、

澤村

「遅いなあ……。」

澤村、再びキーボードを叩き出す。

越智、入ってくる。

越智

「おはようちゃん!」

澤村、越智をちらっと見て顔を戻し、

澤村

「おはようちゃん、って……。」

越智

「咲希ちゃんは相変わらずそっけないな。ところで何、この机？」

越智、澤村の向かいのデスクを指す。

澤村

「知らない。朝来たらあったの。」

越智

「ふうん。あ、はい、領収書。」

澤村

「なんだ、仕事で来たんだ。」

越智

「おい、この越智様を何だと思っているんだよ。」

澤村

「会社のために朝から晩まで健気に働く弱小サラリーマン。可愛いそうな俺!」

越智

「先に言うなよ! しかも決めゼリフまで。それも雑すぎるだろ!」

澤村

「だってもう聞き飽きたもん。」

越智

「冷たいなあ。だから彼氏ができないんだぞ。」

澤村

「ひどーい! 明日香に言いつけてやる。」

越智

「うわっ、ちょっと待って! 俺が悪かった!」

澤村

「そんなに明日香が怖いんだ。」

越智

「しょうがないだろう。また、愛妻弁当は作りません、って言われたらさびしい

じゃないか。」

澤村

「明日香、料理がうまいからね。」

会話中、内田、ノートパソコンを持って入ってくる。

越智 「でも、なんで愛しの旦那さまより同期の咲希ちゃんの方が大事にされてるんだよ〜。」

内田 「(越智をにらみながら) ちゃんと人を見ているからじゃないですか?」

澤村、越智、内田の方を見る。

越智 「・・・出たな。生意気な新人。」

内田 「内田です。」

澤村 「内田くん、おはよう。昨日お休みだったけど、体調でも悪かったの?」

内田 「あ、あの・・・。」

内田、口ごもる。

越智、内田にかぶせるように、

越智 「何その差。」

澤村 「はいはい、では領収書は確かに受け取りましたので、後程精算しておきます。」

越智 「よろしくちゃん!」

澤村、無反応でキーボードを叩き出す。

内田、再び越智をにらむ。

越智、やれやれといった感じでため息をつき、出ていく。

内田が澤村へ話しかけようとすると、徳井、相原が入ってくる。

徳井、澤村の方へ歩いて行く。

相原、入り口で立ち止まる。

徳井 「越智くんはまた、おはようちゃん、って言ったの?」

澤村 「あ! 課長。」

澤村、徳井を見て、相原を見る。

徳井、離れたデスクの方へ行く。

徳井 「相原さん!」

相原、一礼してから徳井の横へ行き、立つ。

澤村、立ち上がる。

徳井 「本日よりわが総務部に配属された相原美園さんよ。」

相原 「相原美園です。よろしくお願ひします。」

澤村 「澤村咲希です。よろしくお願ひします。」

徳井 「相原さんには、澤村さんがやっていた庶務業務を引き継いでもらって、澤村さんには経理業務のみを担当してもらおうと思っっているわ。」

澤村 「えー！」

徳井 「よかったわね、澤村さん。残業減るわよ。」

澤村 「そうですね。」

徳井 「じゃあ相原さん、席はそこだから。」

相原 「ありがとうございます。」

徳井、内田を見て、

徳井 「あら、どうしたの、内田くん？」

内田 「所長に言われて相原さんのパソコン持ってきました。」

徳井 「ああ、そうなの。ありがとう。よろしくね。」

内田、空いている席にパソコンを置きに行き、何か操作をしている。
その間に相原、澤村の横にやってくる。

澤村 「相原さん、よろしくお願ひします。」

相原 「やだ、忘れちゃったの、咲希。」

澤村 「え？」

相原 「新人研修一緒だったじゃない。」

澤村 「え！同期なの？」

相原 「もーう、ひどいなあ。」

澤村 「ごめんね。え、でも、この時期に異動なんてめずらしい……。」

相原 「(遮って)また美園って呼んでね。」

澤村 「あ、うん。」

内田 「相原さん、設定終わったので使えますから。」

相原 「ありがとうございます。咲希、また後でね。」

内田 「うん。」

相原、自分の席に座り、内田とパソコン操作を始める。
澤村、その様子を不思議そうに見つめる。

暗転。

引き続き総務部。

鐘が鳴る。

明転。

澤村、相原、話しながら入ってくる。

相原 「明日のお昼も楽しみだな。この辺結構お店多いのね。」

澤村 「しかも結構安いでしょ。」

相原 「ね。助かるわ。」

澤村 「でも、本社は社食があるからもつと安く済むでしょ。」

相原 「え？」

澤村 「え？」

相原 「・・・あ！ わたし、明日はお寿司が食べたいな。」

澤村 「お寿司！ お寿司はさすがに高いよ。」

相原 「そっか。」

澤村 「じゃあさ、今度帰りに回転寿司行かない？」

相原 「えー！ じゃあ、歓迎会ということで咲希のおごりね。」

澤村 「どうしようかな。美園高い皿ばかり食べそうだからな。」

相原 「失礼だな。」

澤村 「あ、回転寿司といえば、前にうちの父親と行ったらね、食べたのが、真いか、やりいか、げそ、こういか、剣先いか。」

相原 「全部いかじゃん！」

澤村 「そうなの。どれだけいか好きなのっていう。」

相原 「だね。」

風谷、入ってくる。

澤村、風谷を見る。

風谷、澤村を見る。

相原 「風谷さん！」

風谷、相原を不思議そうに見る。

風谷 「どちらさまでしたっけ？」

相原 「え？」

風谷 「以前どこかでお会いしていましたか。」

相原 「・・・あ、いえ、ごめんなさい。勘違い、みたいです。」

風谷 「もしかしたらこちらこそ、すみません。」

澤村 「(つひやくまう)(なぎや、さん……)。」

風谷 「……あの、徳井さんはいるかな。」

澤村 「大変申し訳ございません。徳井は休み時間でまだ戻っていないので少しお待ちいただけます。どうぞ。」

風谷 「あ、気を遣わないで。僕も、異動で今日からこの営業所なんだ。」

澤村 「そういうことなら正直に、課長はいつもお昼休みを5分過ぎてから戻ってくるんですよ。」

風谷 「そっか。しょうがないな……。」

澤村 「あの、ミーティングルームにどうぞ。戻ってきたら伝えますので……。」

風谷、一礼し出ていく。

澤村 「お茶くらいは出してくるね。」

相原 「嘘でしょ？」

澤村 「え？」

相原 「知ってるんですよ。」

澤村 「何が？」

相原 「風谷さん。」

澤村 「知らないよ。」

相原 「でも……。」

澤村 「美園こそ、ほんとは知り合いなの？」

相原 「……勘違いみたい。」

澤村 「でも、美園から風谷さんって声掛けてたよね。」

相原 「……ごめん、ちょっとコーヒー買ってくる。」

澤村 「あ、うん。いってらっしゃい……。」

相原、出ていく。

澤村、相原を見送り、そのまましばらく見つめている。

澤村 「あ、お茶。」

澤村、慌てて出ていく。

ゆっくり照明②に切り替わっていく。(暗転でもよい。
(音楽、フェードイン。)

違う事務所。
舞台手前等を使用。

ゆっくり照明②に切り替わる。(または明転。(照明②))
(音楽、フェードアウト。)

大野、笹井、話しながら入ってくる。

笹井 「連れ戻しましょう！ 何かあってからじゃ遅いんですよ。」

大野 「でも、もう行ってしまったんだから、12日間は基本的に帰って来られないだろう。」

笹井 「そりゃそうですね。」

大野 「そもそも風谷の言うことを鵜呑みにもできないし。」

笹井 「・・・はい。正直。」

大野 「だよな。あいつ、一目惚れされるタイプじゃないよな。」

笹井 「いえ、そこに同意した訳じゃないです。風谷さんは大野さんと違って話せばすぐに素敵な人とわかります。」

大野 「えー、笹井も風谷に一目惚れしたの。」

笹井 「そんな訳ないじゃないですか！ でも少なくとも大野さんよりは・・・。」

大野 「え、俺ってそんなにだめ？」

笹井 「・・・。」

大野 「黙るなよ。実感するだろう。」

笹井、無視して、

笹井 「風谷さんは、今回話を聞くまで無愛想でなんか感じ悪いと思っていたんです。でも。」

大野 「でも。」

笹井 「あんなに愛情深い方だなんて思いもしませんでした。」

大野 「あの事故が起こるまでは、人並みの明るさも持ち合わせていたしなあ。」

笹井 「人並みって・・・。ただ、風谷さんならこっさり見張ることはないじゃないですか。技術課の人が先に向こうに行っていることは言っていないと思います。」

大野 「それは笠原さんの判断だから。・・・もしかしたら、風谷を試しているのかもしれないなあ。」

笹井 「試す？」

大野 「terminal 288のルールを守るか。」

笹井 「ああ。でも、もしも犯したとしても、今回だけは見逃してほしい・・・。」

大野 「・・・同感。だけど、それは、イコール、法を・・・。」

笠原、入ってくる。

笠原 「なにが同感なの？」

笹井 「笠原さん！」

大野 「いえ、何でもないですから。」

笠原 「ふーん。まあいいけど。」

大野 「そういえば、彼女も向こうに現れたらしいですよ。」

笠原 「あ、報告届いた？」

笹井 「はい。」

笠原 「凧谷くんは？」

笹井 「聞いてないです。」

笠原 「そう。」

大野 「まあ彼女もいきなり何かをやらかしたりすることはないでしょうから。」

笠原 「それもそうだね。またなんかあったら教えて。」

大野・笹井 「はい。」

笠原、出ていく。

笹井 「そう言えば笠原さんがこっちにいるのってめずらしいですね。」

大野 「管轄が違うからなあ。」

笹井 「確かに最初から口出してくることってないですよね。」

大野 「そうだなあ、まずないと思う。今回はたぶん単純に凧谷のことが……。」

笹井 「え？」

大野 「いや、なんでもない。笠原さんは私情を挟むような人じゃないし。」

笹井 「基本的に厳しい判断をされる方ですよね。」

大野 「そうだな。」

笹井 「凧谷さん、だいじょうぶかな。」

大野 「うーん、わからん。でも、そんなこと心配したってしょうがないよ。」

笹井 「……そうですね。」

大野 「じゃあ、俺たちも仕事に戻りますか。」

笹井 「はい。でも10年前の事故を今さら調べろって無理がありますよ。そもそも今回の件と何か関係あるんですか？」

大野 「さあ。」

笹井 「もう！ 大野さんがやるように言ったんですよ。……あれ？ そう言えば篠崎研究室って確か彼女も……。」

大野 「(遮って) なあ、笹井。お前、10年前は高校生だったよな？」

笹井 「そうですね。」

大野 「スカートってやっぱり短いのはいたの？」

笹井 「……は？ その情報って必要ですか？」

大野 「……は？ その情報って必要ですか？」

大野 「必要。俺の中では重要。」

笹井 「……あたし、大野さんのそういう軽々しいところがもてないんだと思います。」

大野 「……同感。」

笠原、入ってくる。

笠原 「なにが同感なの？」

笹井 「笠原さん！」

大野 「いえ、ほんとは何もありませんから。」

笠原 「ふーん。まあいいけど。」

笠原、出ていく。

笹井 「びっくりしたー！」

大野 「2度も出てくるとはなあ。」

笹井 「今の話、聞かれてないですよね。」

大野 「怪しいな。まあしょうがないよ。それに聞かれて困る話はしてないし。」

笹井 「そうですか？」

大野 「……たぶん。さあ、仕事仕事！ あ、もう、あの単語は言うなよ。また笠原さんが出てくるかもしれないからな。」

笹井 「2回とも言ったのは大野さんじゃないですか！」

大野、笹井、話しながら出ていく。

ゆっくり暗転。

音楽、フェードイン。

4場

総務部。

澤村、相原、席にいる。

明転。(照明①)

音楽、フェードアウト。

徳井、凧谷が入ってくる。

徳井、凧谷、徳井の席の前で並んで立つ。

徳井

「ちょっといいかしら。」

澤村、相原、立ち上がる。

徳井

「こちら凧谷くん。営業部に今日付けで異動してきたそうだね。わたしの同期らしいんだけど、ちょっと忘れちゃって。」

凧谷

「ひどいな。」

徳井

「だから、ほんとごめんね!」

凧谷

「凧谷です。よろしくお願いします。」

澤村

「よろしくお願いします。」

相原、無言で凧谷を見ている。

徳井

「じゃあ、そういうことで。」

澤村、相原、座ってキーボードを叩き出す。

凧谷、徳井に軽く一礼する。

徳井、手を挙げて別れの挨拶をして、椅子に座る。

凧谷、出口に向かうが、澤村の横にやってくる。

相原、凧谷が話し始めると手を止めて凧谷をみつめているが、途中から澤村を厳しい表情で見つめ始める。

凧谷

「澤村さん、さっきはお茶をありがとう。」

澤村

「いえ、給茶機のお茶を出ただけですし。」

凧谷

「・・・でも、気持ちの問題だから。」

澤村

「はあ。」

凧谷

「ありがとう。」

澤村 「いいえ、どういたしまして。」

凧谷、黙り込んで澤村を見つめる。

澤村 「あの・・・？」

凧谷 「あ、失礼。」

凧谷、目を逸らす。

澤村 「あ！ そういえばなんでわたしの名前知って・・・。」

凧谷、さっと出口に向かう。

澤村、げんげんな表情をすると、相原が見ていることに気づく。

相原、目をそらして、キーボードを叩き始める。

澤村、ため息をつく。

内田、荷物をいくつか抱えて入ってくる。

凧谷、内田、ぶつかる。

内田 「あ！ すみません。」

凧谷 「いや、こちらこそ前をよく見てなくて。」

内田、視線が止まる。

凧谷、不思議そうな顔をする。

内田、ふいと目を逸らして澤村の方へ向かう。

凧谷、出ていく。

内田 「澤村さん、郵便物、下に届いていました。」

内田、澤村に荷物を渡す。

澤村、受け取りながら、

澤村 「ありがとう。あ、内田くん、今日から相原さんが庶務担当なの。郵便物の仕分けく

らいはわたしもやるけど。」

内田 「・・・わかりました。」

内田、相原を見て少し表情を曇らせる。

澤村、立ち上がり、相原の横へ行く。

澤村 「美園、技術部の内田くん。」

相原、笑顔で立ち上がる。

相原 「朝はありがとう。」

澤村 「あ、そっか。彼はね、2週間くらい前に入社したばかりなの。」

相原 「そうなんだ。よろしくね。」

内田 「・・・よろしくお願いします。」

相原、座る。

内田、出ていく。

澤村、机に戻り、そのまま書類を手に取り、

澤村 「あ、課長。」

徳井 「うん？」

澤村、徳井の横へ行き、

澤村 「承認お願いします。」

徳井 「はいはーい。」

澤村 「・・・課長。」

徳井 「うん。」

澤村 「今日は1日(いっぴ)でもないのに、異動多いですね。」

徳井 「そうなのよね。しかもわたしも朝所長に呼ばれて初めて知ったのよ。」

澤村 「そんなこと、あるんですね。」

徳井 「いや、初めて。で、どう、引き継ぎは？」

澤村 「急に言われても無理ですよ。何にもできていません。」

徳井 「そうよね。所長も驚いていて、急遽担当を分けたんだけど、それでよかったかしら？」

澤村 「わたしは構わないですけど、普通は明日香の後に入るんじゃないですかねえ？」

徳井 「わたしもそう思って、営業部は先月谷さんが寿退社したばかりだから、って言ったんだけど、なんか所長が総務部に、って言うのよねえ。」

澤村 「はあ。」

徳井 「でも、これでやっと楽になるでしょ？ 休みも取りやすくなるわよ。入社6年目なんだから、長期休暇を取って海外旅行でも行ってらっしゃい。」

澤村 「ありがとうございます。考えておきます。」

澤村、席に戻り、受け取った荷物の仕分けを始める。

5場

引き続き総務部。

越智、入ってくる。

越智 「咲く希ちゃん！」

澤村、仕分けしていた荷物を手にして、

澤村 「これは営業部。こっちは技術部。ということで、あとはよろしく！」

越智 「新人に渡せばいいのね。って、技術部の分はあいつが持って行けばいいのに！」

澤村 「内田くん、宛先までは見てくれないんだな。」

越智 「役立たず。」

澤村 「武志よりははるかにいいですから。」

越智 「うっそー！ 俺の方が絶対咲希ちゃんに尽くしてるって。」

澤村、無視して座る。

越智、渋い顔をした後、荷物を見ながら、

越智 「え！ もう風谷さん宛てのが来てる。」

相原、顔を上げる。

越智 「あの人さー、なんか感じ悪いよな。」

澤村 「失礼だよー。課長の同期だよ。」

越智 「えー！ そうなの。見えない。」

徳井、パソコンを持って歩いてくる。

徳井 「どういう意味？」

越智 「いやいや。全然意味なんてないっすよ。」

徳井 「あなたって人はほんと……。こんなところでさぼってないでちゃんと仕事しなさいよー！」

越智 「さっき夕方から取引先に行くの、決定しましたよ。」

徳井 「そうなの、がんばりなさい。じゃ、わたしは所長と打合せだから。」

徳井、出ていく。

澤村 「ねえ、風谷さんって今日来たばかりだから、武志にどん引きしてるだけじゃない

の。」

越智 「ほんと、咲希ちゃんって俺に容赦ないよな。(ポーズを決めながら) かわいそうな俺！」

澤村 「・・・それより何しに来たの？」

越智 「あ、さっき明日香に昨日言っていた営業、夕方に決定したから帰り遅くなるって連絡したら・・・。」

澤村 「うん。」

越智 「じゃあ咲希と飲みに行くから、とりあえず伝えといて、だつて。」

澤村 「おおっ！」

越智 「時間とかは手が空いたら連絡するらしいよ。」

澤村 「了解。あ！ 美園。」

相原 「うん？」

澤村 「美園も行かない？ 今日明日香と飲むんだけど。」

相原 「明日香？」

澤村 「谷明日香！ 同期の。先月結婚して越智明日香なんだけど。」

相原 「え、あ・・・。」

澤村 「あ、こいつが旦那の越智武志。つて、同期だから覚えてるよね？」

越智 「え？」

相原 「あの・・・。」

越智 「同期、なの？」

澤村 「うん、今日日本社から異動してきたの。」

相原 「ごめんなさい、わたし男性はあまり覚えてなくて・・・。あと、ごめん咲希、今日は無理。」

澤村 「そっかー。」

相原、その間に席を立ち、出ていく。

越智 「・・・あのコ、同期なの？」

澤村 「そうだよ、相原美園っていうの。」

越智 「ふーん。覚ええないなあ。あんなすらりとした美人、この俺が忘れるわけないの。」

澤村 「明日香に会ったら伝えておきます。」

越智 「うわー！ 咲希ちゃん、ほんと勘弁して！」

澤村 「どうしようかな。」

暗転。

バー。

澤村、相原、徳井の机・椅子がカウンターのように並びで設置されている。

笠原、カウンターの内側にいる。

JAZZ音楽、イン。

明転。(照明③)

澤村、谷、入ってくる。

笠原、椅子の方を手で促す。

音楽、フェードアウト。(または小さくインのまま。)

澤村 「ふうん、確かに素敵なバーだね。」

谷 「そうでしょう。terminal 288。」

澤村 「え？」

谷 「お店の名前。」

澤村 「ああ。」

谷 「オーブンしたばかりらしいよ。」

澤村 「ふうん。でも、ほんとに2軒めまで来ちゃってだいじょうぶなの？」

谷 「だからだいじょうぶだって！」

澤村 「武志かわいそう。」

谷 「心にもないことを。」

澤村 「ばれた？」

谷 「うん。武志がいつも、咲希ちゃんがつれない、ってぼやいてるから。」

澤村 「明日香だけが優しくしてあげればいいよ。」

谷 「いや、わたしも家では尻に敷いてるから。」

澤村 「知ってる。」

谷 「ひどい。あ、咲希、ここのジン・バック、すごくおいしいんだって。」

澤村 「そうなんだ。」

谷 「武志が、咲希ちゃんにこれはお勧め！って言った。」

澤村 「ふたりで来たんだ。ラブラブじゃん。」

谷 「そりゃあ新婚ほやほやだからね。」

澤村 「よかった。」

谷 「何それ。」

澤村 「まあ、明日お礼言っておくよ。わたしの好きなカクテルを覚えていてくれてありがとう、って。」

谷 「うん、たまには褒めてあげて。」

澤村 「そうする。あ、そうだ。明日香覚えてる？ 相原美園ちゃん。彼女がうちの部署に異動で来たんだよ。懐かしいよね？」

谷 「え？ 相原美園？？」

澤村 「うん。」

谷 「聞いたことないんだけど。」

澤村 「え、新人研修一緒だったでしょ。」

谷 「え？」

澤村 「え？」

谷 「え、って。咲希ってば、もう酔ってるの？ 相原美園なんていた？」

澤村 「うーん・・・。」

谷 「うーん、って、もう。どうしたのよ。」

澤村 「それがね・・・。」

凧谷、入ってくる。

澤村 「あ。」

澤村、凧谷、見つめ合う。

澤村 「こんばんは。」

凧谷 「・・・こんばんは。」

谷 「知り合い？」

澤村 「うちの課長の同期の凧谷さん。」

谷 「こんばんは。」

凧谷 「こんばんは。」

澤村 「お仕事帰り、ですか。」

凧谷 「あ、うん、まあ。・・・ジン・バック、飲んでるの。」

澤村 「これから頼もうと思って・・・。え？」

凧谷 「・・・あ。」

澤村 「あの・・・。」

凧谷 「ここのおいしいんだ、・・・ジン・バック。」

澤村 「そうみたい、ですね。」

凧谷 「うん。」

澤村 「・・・あ！もしかして越智くんに聞きました？」

凧谷 「え？」

澤村 「明日香！ 凧谷さんはね、今日営業部に異動で来られたの。」

谷 「あ、そうなんですか。わたし、越智の妻の明日香です。主人がお世話になりま
す。」

澤村 「三人同期なんですよ。明日香は先月寿退社したばかりなんです。」

凧谷 「そうなんだ。」

凧谷、一礼して笠原の前へ行く。

凧谷 「サイドカー。」

凧谷、座る。

谷 「・・・物静かな人ね。ちょっと不愛想っていうか。」

澤村 「うーん、武志もそう言ってた。」

谷 「あいつとは真逆っぽいもんね。」

澤村、凧谷の方を見る。

谷 「咲希！ 頼もうよ。あたしたち、しゃべりすぎ。」

澤村 「うん。」

暗転。

JAZZ音楽、フェードイン。

総務部。

澤村、相原、徳井、席にいる。

音楽、フェードアウト。

明転。(照明①)

相原、書類を持って立ち上がり、徳井の前へ行く。

相原 「課長、承認お願いします。」

徳井 「はいはい。・・・相原さん、もう慣れたわねえ。」

相原 「おかげさまで。」

徳井 「1週間経ったっけ。」

相原 「はい。」

徳井 「早く歓迎会をしないとね。」

相原 「ありがとうございます。」

徳井 「相原さんは飲めるの？」

相原 「はい。よくひとりでも行きますよ。」

徳井 「そうなの。美人だからよく声掛けられるでしょ。」

相原 「わたしの方から掛けます。」

徳井 「積極的。あ、何飲むの。」

凧谷、入ってくる。

相原 「・・・ジン・バックを。」

澤村、凧谷、動きを止めて相原を見る。

徳井 「へえ。かわいくカルアミルクとかカンパリオレンジあたりに行くのかと思ったわ。」

相原 「思い出の、カクテルなんです。」

徳井 「意味深ね。」

相原、一礼して席に戻ろうとする。その際、凧谷を見る。

凧谷、何事もなかったように徳井のほうへ行く。

相原、席に着く。

凧谷 「遅くなって申し訳ない。朝から得意先だったもので。」

徳井 「あ、凧谷くん、お疲れさま。越智くんと一緒だったんでしょ。」
凧谷 「え？」

徳井 「朝そっち行ったらホワイトボードにふたりとも直行ってあったから。」

凧谷 「ああ。・・・彼とは別で、ちょっと。」

徳井 「そっか。そういえば、凧谷くんってさー。」

凧谷 「うん？」

徳井 「ネクタイ、それしか持ってないの？」

凧谷 「え？ あ・・・。」

徳井 「いや、毎日同じだしちょっとくたびれてるじゃない。営業さんだから・・・。」

澤村、遮るように立ち上がって、

澤村 「課長!」

徳井 「ん、なあに？」

澤村 「・・・あの、後でいいのでちょっと見てもらってもいいですか。」

徳井 「うん、わかった。じゃあ凧谷くん、昨日のことなんだけど・・・。」

凧谷 「もう少し詳しい説明、だよね。」

徳井 「そうそう。ミーティングルーム行く？」

凧谷 「その方がいいな。」

澤村、椅子に座る。

凧谷、徳井、出ていく。

澤村 「ねえ、美園もジン・バックが好きなの？ わたしも・・・。」

相原 「(遮って) ミモザが好きよ。」

澤村 「え？」

相原 「・・・ごめんね。驚かせた？」

澤村 「・・・うん。」

相原 「でも、・・・思い出、だから。」

澤村 「そうか。好き、とは言ってなかったっけ。こっちこそごめん、早とちり・・・。」

相原、澤村が言い終える前にキーボードを叩き始める。

澤村、小さくため息をつき、キーボードを叩き始める。

内田、入ってくる。すぐに足を止めて相原を見る。

澤村、内田に気づく。

澤村 「内田くん、どうしたの？」

内田 「いや、何でもな・・・、あ、ボールペンもらえますか。」

澤村 「え！ もう失くしちゃったの？」

内田 「あ、えっと・・・。」

澤村 「うそ、部長に言われたか。」

内田 「え？」

澤村 「美園、内田さんにボールペン出して……。」

内田 「(遮って) 澤村さん、お願いします。」

澤村 「え？……うん、わかった。美園、ちょっと倉庫行ってくる。」

相原 「いってらっしゃい。」

澤村、内田、出ていく。

相原 「何、あのフォロー。」

越智、入ってくる。

越智 「あの、咲希ちゃんは？」

相原 「さあ。」

相原、さっと出ていく。

越智 「……ボールペンは、また今度でいいか。」

越智、出ていく。

ゆっくり照明④に切り替わっていく。(②でもよい。または暗転。)

道路。
舞台手前等を使用。

雑踏の音。

ゆっくり照明④（照明②でもよい。）に切り替わる。（または明転。）
雑踏の音、フェードアウト。

谷、時計を見ながら入ってくる。中央辺りで立ち止まって、

谷 「一番、か。」

澤村、越智、入ってくる。

越智 「明日香！」

谷 「咲希！」

澤村 「明日香、お待たせ〜。」

谷 「今来たばっかだよ。」

越智 「ちょっと待て！ 明日香、俺、見えてる？」

谷、越智を見ずに、

谷 「武志から聞いた？」

澤村 「ううん。全く。」

谷 「えーっ！」

越智 「無理だっ！ 俺、今日会社着いたの午後だし。すぐに総務部行っても咲希ちゃんいないし。」

谷 「ここ来る時に話さなかったの！」

越智 「会って話した方が早いだろう！」

谷 「それはそうだけど！」

澤村 「あの！ いちやいちゃするのでもいいんだけど、大変な話っていったい何？」

谷 「あー、ごめんごめん。あのね、咲希、落ち着いて聞いてね。」

越智 「美園ちゃんのことなんだけど。」

谷 「この間の日曜日にね、ふたりで話したのよ。」

越智 「同期にいたかなあ、って。」

谷 「武志はあんな美人を忘れるはずがないそうぞ。」

越智 「それは謝ったじゃないか〜。」

澤村 「ねえ、それで？」

谷 「昨日ちょっと研修の時にみんなで撮った写真があったな、って出してみたの。そう

したら……。」

谷、カバンから写真を取り出して、澤村に渡す。

越智 「この中に美園ちゃんはいないんだ。」

澤村 「え？」

谷 「みんな名前を思い出せるけど、相原美園っていう人物はいないの。」

澤村、谷を見て、写真に目をやる。

澤村 「……うん。いない、ね。」

谷 「同期で写っていない人もいないでしょ。」

澤村 「……うん。実は、わたしも最初に同期と言われてあれ？と思ったんだ。それに……。」

越智 「態度。」

澤村 「え？」

越智 「つれないんだよね。」

谷 「は？」

越智 「嘘です嘘です。妙な距離感があるというか……。でも俺にはともかくとして咲希ちゃんへの態度だよなあ。視線とか、話し方とか、結構きつい時あるよな。今日も、咲希ちゃん出てすぐに悪態ついてたし。」

澤村 「え？」

越智 「俺が総務部に行こうとしたら咲希ちゃん、内田と出てきた時あったじゃん。」

澤村 「ああ。ボールペン取りに行ったの。」

越智 「え！ 言つてよ。俺もボールペンもらいに行ったのに。」

澤村 「知らないよ。」

越智 「つていうか、美園ちゃんに引き継いだんだろ？」

谷 「武志、いいから話進めて。」

越智 「あー、ごめん。そう、咲希ちゃんと入れ違いで総務部に入ろうとしたんだよ。そうしたら、美園ちゃんが怖い顔して一言言ったから。俺、思わず用件誤魔化しちゃった。」

谷 「でも、それって咲希に対して言っていたわけじゃないじゃない。」

澤村 「ううん、たぶん武志の言う通りだと思う。正直睨まれている気がすることは多いの。話をしてもなんか噛み合わないし、不協和音を奏でるっていうか、そういうことが日に日に増えていって。わたしもしかしたら嫌われているのかな、と思っていたんだけど……。」

谷 「咲希。まだ1週間しか一緒にお仕事してないでしょ。」

澤村 「うん。」

越智 「俺ならともかく咲希ちゃんだろ。何があつたわけでもないんだろ。」

澤村 「うん。たぶん。……そうだね、武志ならともかく！」

越智 「だろぅ。俺、内田に2日で嫌われたもん。」

澤村 「早かったよね。」

越智 「フオロー入れてくれよ！ でも咲希ちゃんがこれで元気になったなら……。」

谷 「(遮って) まあ立ち話もなんだから、続きはどこかに入って飲みながらにしよう。」

澤村 「うん。じゃあ今日は武志のお「り」で！」

谷 「お小遣い分からお願います。」

越智 「冗談はよせよ！ ふたりとも俺より飲むだろう！」

谷 「武志が弱いんだよ。」

澤村 「そうだよ。」

澤村、越智、谷、話しながら来た方向と逆方向から出ていく。

内田、入ってくる。

内田 「大野さんたち、間に合うかな……。」

内田、しばらく考え込んでいるが、踵を返して来た方向から出ていく。

ゆっくり照明①に切り替わっていく。(暗転でもよい。
雑踏の音。)

総務部。

ゆっくり照明①に切り替わる。(または明転。(照明①))

澤村、入ってくる。席に座って、パソコンを起動しながら手を動かすが、そのうちぼーっとし始める。

凧谷、入ってくる。澤村は気づかない。

凧谷 澤村さん、おはよう。

澤村 「うわっ！ おはようございます。」

凧谷 「ごめん、驚かせて。・・・今日は早いね。」

澤村 「なんだかよく寝られなくて。早く起きちゃいました。」

凧谷 「・・・悩み事でも？」

澤村 「ええ、まあ。わたしにしては珍しく。ちょっと理解を超えちゃって。」

凧谷 「理解・・・。」

澤村 「あ、理解できないことはいくらでもあるんですけどね。もう少し頭がよかったらな。」

澤村、凧谷、笑顔で見つめ合う。

澤村、見つめ合っていたことに気づき、「ごまかすように、

澤村 「凧谷さんこそ！ だいぶ早いじゃないですか。」

凧谷 「・・・うん、ちよっとね。」

澤村 「うちの営業所、そんなに忙しくないはずなんだけどなあ。」

凧谷 「ひどいなあ。同期ががんばっているのに。」

澤村 「だからですよ。会社の将来が心配。なので凧谷さん、よろしくお願いします。」

凧谷 「それはちよっと荷が重いなあ。」

澤村、凧谷、笑う。

凧谷 「あのさ、この間はネクタイのことで、助け舟を出してくれてありがとう。」

澤村 「あ・・・、別に、何もしてないですよ。課長に用があっただけ、です。」

凧谷 「らしいなあ。」

凧谷、微笑む。

澤村、意外そうな顔で見返す。

凧谷 「あ、いや・・・。」

凧谷、目を逸らす。

澤村 「そのネクタイ、素敵なデザインですね。」

凧谷 「え。」

澤村 「わたしも、そういう感じが好きなんです。贈り物ですか。」

凧谷 「うん。昔……。」

凧谷、澤村を見つめながら黙り込む。

澤村 「ごめんなさい！ よけいなことを聞いちゃいましたね。」

凧谷 「いや、いいんだ。こちらこそ……ありがとう。」

澤村、首をかしげ、不思議そうに凧谷を見る。

凧谷、澤村を見つめている。

澤村 「……凧谷さんって。」

凧谷 「え？」

澤村 「不思議な人ですね。ほとんど話したことないのに、いつもなんていうか、懐かしそうな眼をしている。」

凧谷 「あ……。そうかも、しれないね。」

澤村 「えー？」

澤村、笑う。

凧谷、つられて笑う。

相原、入ってくる。すぐに立ち止まり、複雑そうな顔をして二人を見る。

澤村、相原に気づく。

凧谷、相原に気づく。

相原 「おはよう、」「ぎいます。」

澤村 「美園、おはよう。」

凧谷 「(小さく)おはよう」「ぎいます。」

凧谷、澤村を見てから出ていく。

相原 「早いのね。」

澤村 「……うん。」

相原 「凧谷さん……うん、別に。」

澤村 「……。ねえ、美園って、凧谷さんのこと……。」

相原 「……え？」

澤村 「ごめん、気にしないで……。」

澤村、相原、黙り込む。

徳井、入ってくる。

徳井 「おはよう。」

澤村 「おはようございます。」

相原 「おはようございます。」

徳井 「……どうしたの？ ふたりともなんか朝から葬式みたいな顔をしてるけど。」

澤村 「葬式って！」

徳井 「喧嘩でもしたの。」

澤村、相原、顔を見合わす。

相原、徳井を見てにっこり微笑み、

相原 「そんなわけないじゃないですか。」

徳井 「そうよね。同期同士仲良くやってちょうだいよ。」

相原 「はい。」

徳井、自分の席へ行く。

澤村 「同期……。」

暗転。

音楽、フェードイン。

違う事務所。

明転。(照明②)

音楽、フェードアウト。

大野、入ってくる。

笹井、追って入ってくる。

笹井 「大野さん！」

大野 「お、笹井、おはよう。」

笹井 「おはようございます。って、遅いですよ！」

大野 「いやー、ちょっと昨日ががんばったら起きれなくて。」

笹井 「え、あたしが帰った後まだ残業してたんですか？ でもかなり遅かったですよね。」

大野 「いや、まあ、ちょっといろいろあつてさー。」

笹井 「いろいろ？」

大野 「お出かけしたところが。」

笹井 「あー、そうですか。それよりやっとな調べがつかまりましたよ！」

大野 「おー、間に合ったか。」

「もう！ 数が多いからどの辺りで、って限定されるのがもう少し遅かったらあぶなかつたですよ。」

大野 「だって10年前だぞ。さすがの俺も手を焼くって。」

笹井 「それより今回の件にどう関係があるんですか。いい加減教えてください！」

大野 「笹井って、10年前は高校3年生だろ？」

笹井 「え？ そうですけど。」

大野 「スカートってやっぱ短いのはいたの？」

笹井 「・・・だから、その情報って必要ですか？」

大野 「もう1回言う。必要。俺の中では重要。」

笹井 「・・・もういいです。」

大野 「えー！」

笹井、無視して、

笹井 「あ！ あたし、仕事でterminal 288を利用するって初めてなんですよー！」

大野 「まあ、そもそもこっちはほとんど使われていないからな。」

笹井 「いいじゃないですか。まじめな利用者ばかりで。」

大野 「おっしやる通り。今回も、写真を見る限りは何かをしますタイプには見えなかつただけだなあ。」

笹井 「大野さんが美人びいきだからそう思ったんじゃないですか。」

大野 「妬いてるの?」

笹井 「妬きません。妬く理由がありません。」

大野 「いつもながら手厳しいな。切なくなるよ。」

笹井 「・・・そういえば、先に行っている技術課の人ってすごく優秀なんですよね。」

大野 「あー、あいつ特別処理もできるんだよなあ。」

笹井 「特別処理?!」

大野 「あ、いや、何でもない。まあ心配するな。笹井は俺と一緒にだから安心しろ。いざという時には守ってやるから。」

笹井 「結構です。自分の身くらいは自分で守れます。それに相手は女性じゃないですか。」

大野 「女性だからって油断するなよ。彼女もめっちゃめっちゃ優秀だから。」

笹井 「ふうん、詳しいんですね。」

大野 「1週間調べればいろいろわかるよ。」

笹井 「いろいろ・・・。」

大野 「何に長けているかとか。だから俺らでなく技術屋さんが先に向こうに行ったとか。それに今回はどうしても併せて・・・。いや、何でもない。」

笹井、不満げな顔をする。

大野 「まあとにかくあと3日。実質2日しかないんだ。早く向こうに行けるようにしておこう。」

笹井 「じゃあすぐにあたしの調べたのを見て、調査書を完成させてくださいね。」

大野 「へいへい。あ、お前ももう利用許可申請書を作っちゃっていいぞ。」

笹井 「はい! じゃあ、大野さんが両方作り終えたらあたしが提出に行きますよ。」

大野 「いいの? 助かる。俺正直笠原さんのところに行くの、いろんな意味でちょっと厄介に思っていたんだよね。」

笠原、入ってくる。

笠原 「何が厄介なの?」

笹井 「笠原さん!」

大野 「いえ、何でもないですから。」

笠原 「ふーん。まあいいけど。」

大野 「そういえば、先に行った技術課の人から、やっぱり怪しい雲行きだと連絡ありましたね。」

笠原 「おう。」

笹井 「今日はその関係で来たんですか。」

笠原 「資料室で調べものだよ。」

大野 「あ、じゃあお時間もらえますか。」

笠原 「いいよ。」

大野 「笹井、悪いんだけど第3会議室押さえてコーヒ―2つ持ってきてくれない？」

笹井 「え！・・・いいですけど。」

大野 「ごめんな！」

笹井、何か言いたげな顔をするが、笠原に礼をして出ていく。

笠原 「昨日は遅くまでお疲れさま。」

大野 「え？」

笠原 「調査書、もうほとんどできてるんですよ。」

大野 「・・・はい。」

笠原 「今僕に話しておけば少しでも時間が短縮できるとも思っている。」

大野 「・・・はい。」

笠原 「大野くんは、彼女にほんとは仕事がものすごくできることをアピールした方がいいんじゃないかな？」

大野 「そんな、別に大してできないですよ。今回は風谷が絡むんで、親友のためにがんばっているだけです。・・・って、えっ！」

笠原、にやりと笑って、

笠原 「先に行ってるよ、第3会議室。調査書持ってきて。」

大野 「あ、はい。」

笠原、出ていく。

大野 「はあ。ほんとあの人油断できないわ。」

大野、出ていく。

暗転。

バー。

凧谷、座っている。

笠原、カウンターの内側にいる。

JAZZ音楽、イン。

明転。(照明③)

凧谷、笠原、話している。

相原、入ってくる。

笠原、相原を見る。

相原、凧谷の方へ近づく。

その間に音楽、ボリュームダウン。

相原

「凧谷さん。」

凧谷

「……。」

相原

「警察庁にお勤めの凧谷さん、ですよ。」

凧谷

「相原さん、だったよね。人違いじゃないかな？」

笠原、出ていく。

音楽、フェードアウト。

相原

「本当に、違うんですか。」

凧谷

「……うん。」

相原

「でも、そのネクタイ、確か奥様の形見のようなものでしたよね。」

凧谷

「……。」

相原

「わたしを止めに来たんじゃないんですか。」

凧谷

「……。」

相原

「わたしを止めに来てくれたんじゃないんですか。」

凧谷

「……。」

相原

「それとも、奥様に会いに来たんですか。」

凧谷

「……。」

相原

「……やっぱり奥様を助けにいらしたんですか。」

凧谷

「……僕は今、独身だから。」

相原

「……。」

凧谷

「10年前に、亡くしてしまったから。」

相原 「・・・やっぱりあなたは、向こうから来た凧谷さん、なんですよね。」
凧谷 「・・・。」
相原 「わたしじゃだめですか。」
凧谷 「・・・。」
相原 「どうしてもわたしじゃだめですか。」
凧谷 「・・・。」
相原 「もういいじゃないですか。10年経ったんですよ。」
凧谷 「・・・。」
相原 「あの人が死んで。・・・わたしがあなたを好きになって。」
凧谷 「相原さん。」
相原 「独身、なんでしょう。独り、なんでしょう。」
凧谷 「・・・独身だけど、独りじゃないんだ。」

相原、唇を固く結んで出ていく。
凧谷、入ってくる。

凧谷 「凧谷くん、僕は彼女を説得させるために君をやったんだけどなあ。」
凧谷 「・・・。」
凧谷 「真っ直ぐ向き合えないのが優しさという時もあるんだよ。」
凧谷 「すみません。」
凧谷 「まあ、君にはそんなことができないことはわかっていたからね。僕の方に非がある。」
凧谷 「そんな非だなんて。」
凧谷 「それに、何かあった時は内田くんもいるからね。」
凧谷 「内田くん、って、まさか。」
凧谷 「そう、君の後継者となった内田くんだよ。」
凧谷 「そうだったのか・・・。」
凧谷 「彼ならば何かあってもきっと相原さんから彼女を守ることができる。」
凧谷 「そうですね。でも、いっそのことこの時代で彼女と一緒に命を落としてしまいたいと思わないことも・・・。」
凧谷 「つらかったのはわかるけど、馬鹿なこととは考えるな。」
凧谷 「はい、すみません。それに・・・。」
凧谷 「それに？」
凧谷 「ずっと独りじゃなかったですから。」
凧谷、ネクタイに大事そうに触れる。
凧谷、笑みを浮かべて、

凧谷 「飲むんだろう？」
凧谷 「サイドカー・・・それと、ジン・バックを。」

笠原

「かしくまりました。」

暗転。

JAZZ音楽、フェードイン。

総務部。

澤村、相原、徳井、席にいる。

音楽、フェードアウト。

明転。(照明①)

相原、封筒を持って立ち上がり、徳井の前に立つ。

相原 「課長。」

徳井 「ん、どうしたの？」

相原 「突然で申し訳ありませんが。」

相原、封筒を差し出す。

徳井、受け取って見て、

徳井 「辞表?!」

澤村、顔を上げて相原を見る。

徳井 「いつ辞めたいの？」

相原 「明日です。」

徳井 「明日??!」

相原 「本当に申し訳ありません。」

徳井 「これまた突然どうしたのよ? 今の仕事合わないなら所長に言って……。」

相原 「(遮って) いいえ。一身上の都合です。短い間でしたが、課長には感謝しています。」

徳井 「そ、そうなんだ……。でも、ほんと急ね。」

相原 「はい。」

徳井 「辞めてどうする、って聞いていいのかしら。」

相原 「バーに勤めて好きな人にお疲れさまの1杯を差し出したいと思っています。」

徳井 「そ、それはずいぶんロマンチックな理由ね。……がんばってね。」

相原 「はい。ありがとうございます。」

相原、微笑んで席に戻る。

徳井、封筒を持って立ち上がり、澤村の方へ来て、

徳井 「ちょっと所長のところに行ってくるわ。あ、今日ノー残業デーだから鐘が鳴ったら

帰ってよ。」

澤村 「はい。お疲れさまでした。」

徳井、出ていく。

相原 「咲希。」

澤村 「美園……。急だね。」

相原 「ごめんね。好きな人を、追いかけるんじゃないくて、もう一度、待ちたくなつたの。」

澤村、相原の口調に戸惑いながら、

澤村 「そっか。幸せなことならいいよ。」

相原、澤村を見る。

澤村、戸惑う。

相原 「うん、そうね。それで明日なんだけど……。」

澤村 「うん？」

相原 「8時に会社に来てもらってもいいかな。」

澤村 「8時?! ずいぶん早いね。」

相原 「ごめんね。ちょっとふたりだけで話したいことがあって。」

澤村 「いいけど、今日の帰りとかじゃだめ? ノー残業デーだし。」

相原 「ごめん、用があるんだ。」

澤村 「そっか。じゃあ仕方ないね。あ、明日の帰りもだめ?」

相原 「うん。」

澤村 「……そうだ、後日送別会をしようよ。課長と所長と、あと同期の越智くんも……、あ。」

相原 「え?」

澤村 「ううん、あの、大勢で賑やかに……。」

相原 「(遮って) もう会えない。」

澤村 「あ、そうなんだ……。」

鐘が鳴る。

澤村、パソコンを閉じる準備を始めながら、

澤村 「上がるうか。」

相原 「わたしまだちょっとやることがあるから。」

澤村 「わかった。でも、あまり遅くならないようにね。」

相原 「わかってる。ノー残業デーでしょ。」
澤村 「うん。」

澤村、相原、ぎこちなく笑う。
相原、キーボードを叩き出す。
澤村、パソコンを閉じて立ち上がり、

澤村 「じゃあ、お疲れさま。」
相原 「お疲れさま。」

澤村、出ていく。
相原、澤村を見送ってから、封筒と小さなプラスチック製の箱を持って立ち上がり、
澤村の席へ行く。澤村の机を見つめてから封筒を置き、机をじろじろと見始める。

暗転。
(音楽、フェードインしてもよい。)

引き続き総務部。

明転。(照明③)

(音楽、フェードアウト。)

澤村、眠そうに入ってくる。時計を見て、

澤村 「ぎりぎりになっちゃったけど、美園まだ来てないのかあ。」

澤村、席の方へ行く。机の上の封筒に気づき、手に取って裏返して、

澤村 「美園……。」

澤村、封筒を開けて、手紙を読みだして、表情を曇らせていく。

澤村 「これって、どういうこと？」

相原、ハンドバッグとセキュリティカードを持って走って入ってくる。

澤村 「美園！ この手紙ってどういうこと……？」

相原 「(遮って) なんで… なんで何も起らないの？！」

澤村 「え……。」

相原 「まさか……。」

相原、澤村の机に荷物を置きながら、澤村の机の下をのぞき込む。

相原 「ない……。なんで？」

澤村 「美園？」

内田、入ってくる。プラスチック製の箱を掲げて、

内田 「これですか。」

澤村、相原、内田を見る。

相原 「ちよつとあんた、どういふこと……！」

内田 「緑が丘大学工学部篠崎研究室の相原美園さんですよね。」

相原 「あなたまさか……。」

内田 「警察庁テロ対策部特別処理課爆発物処理班の内田と申します。」
澤村 「え！」
相原 「あの、内田悠介・・・？」
内田 「よくご存じで。」
相原 「わたしたち時限爆弾の解除を研究している者の間では、有名人ですから。」
内田 「ありがとうございます。」

大野、笹井、入ってくる。

笹井 「なんでわたしには技術課としか知らされていないんですか。」
内田 「すみません、内部でも大っぴらにできないんです。」
大野 「あ、いえ、内田さんを責めているのではなくて・・・。」
内田 「俺でしょ。俺。」
大野 「僕、今回自分の素性を知っているのは笠原さんだけだと思っていました。」
相原 「俺、結構調べるの好きだし情報網も持ってるの。それに凧谷とは同期で親友だから。」

相原 「同期・・・。」

大野 「凧谷く！ もうそろそろ入って来いよ。」

凧谷、入ってくる。

相原 「凧谷さん！」
凧谷 「内田さん、ありがとうございます。同姓同名とは言え、まさか向こうから来た人とは思っていませんでした。」
内田 「笠原さんにも内密に、と言われていたもので。それに結局僕は何もしていません。解除したのは凧谷さんじゃないですか。」
相原 「えー！」
凧谷 「いや・・・。大野も、ありがとう。」
大野 「俺もここではまだ何もしていないから。それより、今度は咲希ちゃんを守れてよかったな。」
凧谷 「ああ。」
相原 「やっぱりあの凧谷さんだった・・・。」
大野 「咲希ちゃん、申し訳ないんだけど俺たちはあなたに詳しい説明をすることができないんだ。」
澤村 「はあ・・・。」
凧谷 「いや、澤村さんには後で僕から話すよ。」
大野 「凧谷、それはまずい・・・。」
凧谷 「(遮って)夜、空いてる??」
澤村 「・・・はい。」
凧谷 「相原さん。僕と大野は最近になって10年前、緑が丘大学で起こった爆発事故につ

いて調べ直していました。あれは篠崎先生が実験中にうっかり時限爆弾を発動させてしまった、とのことでしたが、本当は誰か他の人による故意のものですよね？」

相原 「いえ、あれは！」

相原 「僕も篠崎研究室の出身でした。」

相原 「え？」

相原 「篠崎先生は慎重な方でした。万が一を考えて普段の実験用の爆弾は爆薬を積んでいなかったはずですよ。でも、あの日は1棟が半壊するというありえない大きな事故が起こりました。」

大野 「そして、先生はひとりが残って爆薬を使って実験をしていることがあった、と証言していたのがあなた、まだ二十歳（はたち）になったばかりの相原さんでしたね。」

相原 「・・・はい。ただ事故の日は、用事があるから全員18時に上がるようにと言われていたんです。先生も、わたしたちが帰ってすぐに帰られたと思っていました。でもまさか、あんな規模の爆発を起こすもので実験するためだったなんて・・・。」

相原 「・・・相原さん。」

相原 「はい。」

相原 「先生があなたたちを返したのは別の理由だったとしたらどうしますか。」

相原 「え？」

相原 「僕たちと会うため、と言ったら、本当のことを言ってくれますか。あの日僕と咲・・・」

大野 「（遮って） 風谷！ それ以上口にするのは規則に反する。向こうに帰ってからにしよう。」

相原 「まさか事故で奥様を亡くしたっていうのは！」

相原 「死者他1名というのは、僕の妻になる人でした。」

相原 「結婚していたというのは、嘘・・・。」

相原 「婚姻届にサインをもらいに行くはずでした。僕がひさしぶりに研究室に行きたい、と言って、19時に会うことになっていました。でも、僕が仕事で30分遅れることになったと言ったら咲希が・・・。」

澤村、風谷を見る。

大野、同時に、

大野 「（遮るように） 風谷！」

風谷、黙り込む。

内田 「大野さん、そろそろみなさんが入社する時間です。」

大野、時計を見てから、笹井を見る。

笹井 「相原さん、大野があなたのことを調べました。あなたがとても優秀な研究員だったことはよくわかりました。ただ、解除の研究をする前は作る方にかなり興味を持たれていたそうですね。ご自分で簡単なものをよく作っていた、ということもわかりました。そしてわたしの方で大野が言う物質何十種類かを10年前にあなたが購入していることがなかったか調べたと、いくつかみつかりました。」

大野 「計算した結果、その材料でも工夫をすればあの規模の爆発を起こせることがわかりました。」

相原・笹井 「えー」

大野 「俺、実は作る方の研究室にいたの。で、声掛けられて警察庁入ったらテロ対策部で凧谷と同期だったの。」

笹井 「えー！ なんでこっちの捜査課の方に・・・？」

大野 「事件の後、大事な人も守れないのに、とこっちに移った凧谷を思った俺もそんなものを作っているやつのことを考えられなくなった。だめなやつだよなあ。」

笹井 「そんなことないです！ 大野さんは、いつでも自分で考えて答えを出してきました。今回も大野さんが考えたから、わたしが結果を持ってこられました。」

大野 「笹井・・・。もしかして、好きになった？」

笹井 「・・・最初から、ちよっとだけ。」

内田 「・・・あの、時間がもうないんですけど！」

大野 「あー、すまんすまん。ということで、相原美園さん、あなたを署に連行します。」

笹井 「詳しくは向こうに戻ってから聞かせてもらいますので。」

相原、大野、笹井、出ていく。

内田 「澤村さん、僕ら、もう行っちゃうんで。」

澤村 「え？」

内田 「今の知らなかったことにして適当にごまかしておいてください。」

澤村 「えー!!」

内田 「澤村さん、今までありがとうございました。」

澤村 「・・・ううん。こちらこそ。」

内田 「あと、僕・・・。」

内田、澤村に近づき、セキュリティカードを渡して、

内田 「澤村さんが好きでした。」

澤村 「えー!」

内田 「越智さんと話すのだけは耐えられなかったです。」

澤村 「あはは！ ありがとう。内田くん、元気でね。」

内田 「はい。澤村さんも。」

内田、出ていく。

澤村、凧谷を見る。

凧谷、澤村を見てから、近づいていき、

凧谷 「僕ももう出ていくけど、terminal 288で待っているから。」

澤村 「はい。」

凧谷 「咲希には全部話すから。」

澤村 「・・・はい。」

凧谷、澤村にセキュリティカードを渡して出ていく。

澤村 「咲希、って・・・。」

ゆっくり暗転。

バー。

凧谷、座っている。

笠原、カウンターの内側にいる。

JAZZ音楽、イン。

明転。(照明③)

澤村、入ってくる。

音楽、ボリュームダウン。

澤村

「すみません、お待たせしました。」

凧谷

「こちらこそお呼び立てしてしまつて申し訳ない。」

凧谷、澤村を席へ促す。

音楽、フェードアウト。

笠原、澤村の入った方から出ていく。

凧谷

「澤村さん、今朝はごたごたに巻き込んでしまつて悪かったね。会社の方はだいじょうぶだったかな？」

澤村

「課長にセキュリティカードを3枚まとめて返したら、どういふことだと慌てていました。特に美園、相原さんは今日が最後だったのになあ、つて。」

凧谷

「澤村さんはなんて言ったの？」

澤村

「朝来たら机に置いてありました、とだけ。」

凧谷

「そっか。ほんと申し訳ない。」

澤村

「いいえ。」

笠原、OPENのボードを持って入ってくる。

凧谷

「・・・澤村さん、朝の話の続きをしよう。」

笠原、出ていく。

凧谷

「澤村さん、僕は12年前、ちょうど30歳の頃に付き合っていた女性がいたんだけど、彼女と結婚することになってね・・・。」

ゆっくり暗転。

以下、回想シーン。

音楽、フェードイン。

明転。(照明③)

澤村、凧谷、立っている。(座っていてもよい。)
凧谷、婚姻届を持っている。

音楽、フェードアウト。

凧谷 「サインしたよ。おめでとう。」

凧谷、凧谷に婚姻届を渡す。

凧谷、澤村の方に見せるようにする。

澤村、覗き込む。

澤村、凧谷、顔を見合わせて微笑む。

凧谷 「ありがとうございます。」

澤村 「ありがとうございます。」

凧谷 「まさかふたりが結婚するなんてなあ。でも、僕がサインしてよかったの？」

凧谷 「もちろんですよ。このお店で1年前に出会ったんですから。」

澤村 「わたしたちの記念の場所です。」

凧谷 「デートの終わりはいつも来てくれてたしね。」

澤村 「そうですね。」

凧谷 「結婚したらぱったり来なくなったりしないだね。」

凧谷 「必ず来ますよ。きっと咲希がまた terminal 288のジン・バックが飲みたいてってわがまま言うから。」

澤村 「ひどーい、そんな風に思っていたの!」

凧谷 「でも咲希はそれくらいしかわがまま言ってくれないから。」

凧谷 「・・・おふたりさん。仲がいいのはいいことだけど、そろそろお店閉めちゃうよ。」

凧谷 「すみません。」

凧谷 「あとひとりには誰に頼むの？」

凧谷 「サインですか？ 僕が大学院までお世話になった研究室の先生にもらうつもりです。」

笠原 「篠崎教授だね。」

凧谷 「そうです。」

笠原 「咲希ちゃんも同じ大学だったっけ。」

澤村 「はい。でもわたしは文系だから篠崎先生とは直接のお知り合いではないんですけど。」

笠原 「まあ彼はたまにテレビにも出る有名人だからね。それも凧谷くんのような優秀な人材も育てているから、こっちではなおのこと知られているんだけど。」

澤村 「こっち？」

笠原 「いや、気をつけて帰るんだよ。」

凧谷 「はい。ありがとうございます。」

笠原 「どういたしまして。咲希ちゃん、また。」

澤村 「はい。おやすみなさい。」

ゆっくり照明④（または照明②）へ切り変わる。

笠原、出ていく。

澤村、凧谷、舞台前方へ行く。

凧谷 「咲希、明日は仕事を早めにかかるようにするから大学で会おう。」

澤村 「19時ね。余裕を持って来てよ。」

凧谷 「はいはい。」

澤村 「あとそれ、絶対忘れないでね。」

凧谷 「わかってるって。咲希も、またお菓子を買ってくるのを忘れないでね。」

澤村 「はい。」

澤村、凧谷、出ていく。

引き続き、回想シーン。

屋外。

凧谷、電話を掛けながら出てくる。

凧谷

「もしもし、咲希。ごめん、どうしても抜けられなかった。今から向かうから30分遅れる。．．．もちろん、篠崎先生には連絡しておくよ。カフェテリアで待って。．．．え？ お待たせするのも悪いって、咲希、先生のこと知らないんですよ。．．．うん、そうだね。じゃあお願いできるかな。実験棟の方だよ。迷わないようにね。咲希は方向音痴なんだから。．．．ごめんごめん。じゃあ先生には僕だけ遅れます、って言うておくから。．．．はいはい。また後でね。」

凧谷、電話を切って出ていく。

爆発音。

照明⑤（赤使用）に切り替わる。

サイレンの音。

葉橋、入ってくる。

凧谷、走って入ってくる。

葉橋

「ちょっと！ 立ち入り禁止って言われなかった？」

凧谷

「会う約束をしている人がいるって言って入れてもらったんです。」

葉橋

「え？」

凧谷

「この奥の実験棟に篠崎研究室という．．．。」

葉橋

「篠崎研究室は．．．。あの、もしかすると巻き込まれたかもしれません。」

凧谷

「はい？」

葉橋

「先ほど爆発事故が起こりまして、棟が半壊しました。」

凧谷

「え？」

葉橋

「まだ我々も駆け付けたばかりでよくはわからないのですが、今のところ男性と女性が入り交じり発見されています、どうやら即死のようです。」

凧谷

「咲希！」

凧谷、奥へ行くこととする。

葉橋、凧谷を止める。

葉橋

「待ってください！」

凧谷 「咲希！ 咲希〜！」

暗転。

葉橋、出ていく。

1か月後。

凧谷、桑原、電話を持って舞台前方にいる。

電話のコール音。

明転。(照明②等)

凧谷 「はい、凧谷です。」

桑原 「突然お電話致しまして申し訳ございません。Orange Room (オレンジルーム) の桑原と申します。」

凧谷 「あ……。」

桑原 「いつもご利用いただきありがとうございます。今、お時間いただいてもよろしいでしょうか。」

凧谷 「ええ。どうぞ。」

桑原 「すみません、ありがとうございます。いつも凧谷さまと一緒にいらしていただいている澤村さまのことなんですけど。」

凧谷 「咲希の……。」

桑原 「ええ。1か月ほど前に澤村さまがひとりでいらしたことがあったのですが、その時にお買い上げいただいたものをお取り置きしているんです。」

凧谷 「1か月前……。」

桑原 「はい。ワンピースなんですけど、今日はこの後菓子折りも買って出かけないといけないところがあるから、とおっしゃって。」

凧谷 「菓子折り……。」

桑原 「あ、はい。でも全然いらっしやらないのでお電話を差し上げたのですが、番号が使われていません、と繋がらなくて。それで凧谷さまに連絡させていただきました。」

凧谷 「そうでしたか……。あの、澤村ですが、その日事故で亡くなりました。」

桑原 「え？」

凧谷 「僕と待ち合わせをしていたのですが、到着前に事故で……。僕が30分遅れたばかりに彼女だけが……。」

桑原 「すみません！」

凧谷 「あ、そんな、こちらの事情なので。」迷惑をおかけしてすみませんでした。」

桑原 「そんなことないです！ あの、「冥福をお祈りいたします。」

凧谷 「ありがとうございます。」

桑原 「・・・凧谷さま。」

凧谷 「はい。」

桑原 「その日澤村さまがプレゼントにお買い上げいただいたものもあったのですが、そこらは受け取られましたか。」

凧谷 「え？」

桑原 「状態が悪かったりするならば、新しい同じものをわたくしどもから送らせていただけませんでしょうか。澤村さまが凧谷さまに「記念にあげるんですよ。」とおっしゃっていたので、せっかいですから。」

凧谷 「咲希が、記念に、と言っていたんですか。」

桑原 「はい。」

凧谷 「・・・あの、お言葉に甘えてもいいでしょうか。受け取れなかったのです。」

桑原 「もちろんです！」

凧谷 「僕もその日、彼女に渡すことはできなかったんですけど。」

ゆっくり暗転。

桑原、出ていく。

回想シーン終了。

バー。

澤村、風谷、座っている。(立っていてもよい。)

明転。(照明③)

澤村 「それでそのネクタイを毎日つけていたんですね。」

風谷 「いや、さすがに10年はもたないから思い出の日に、とかにしていたよ。そして、君にまた会える毎日は特別の日だったから。」

澤村 「・・・あの、風谷さんが彼女、と言っていた方はやはりわたしのこと、なんですよね。」

風谷 「・・・うん。」

澤村 「わたしは確かに緑が丘大学出身で篠崎先生にも覚えがあるけれど、風谷さんとはお付き合いもしていないし、そもそも生きています。そのネクタイのことだっ

て・・・。風谷さんの話はいったいどういうことか正直・・・。」

風谷 「うん。そうだよ。・・・澤村さん、僕や相原さん、それに内田くんもなんだけど、みんな今から12年後の未来から来たんだ。」

澤村 「12年?!」

風谷 「さっきいたマスター、笠原さんが今からちょうど1年後に最初は1年だけ戻れる葉を開発したんだ。今ではカクテルみたいにして飲むことで12年前まで12日間、つまり288時間遊べることができるようになってね。だから今から12年後は、ちょっとした時間旅行ができるんだよ。このお店は、出発点であり到着点でもある。」

澤村 「はあ。じゃあ風谷さんの話は今から・・・。」

風谷 「1年後の話になるね。」

澤村 「1年後・・・。あの、今朝相原さんから置き手紙があったんですけど。」

風谷 「なんて?」

澤村 「あなたには恨みはないけど、今日ふたりをあの場所で出会わすわけにはいかない。10年も彼を縛らないために、わたしが区切りをつけるから。そんなようなことを。区切りとは、たぶん今朝爆発事故を起こしてわたしを、ということですよね。」

風谷 「そうだね。」

澤村 「そうすると今日あの場所で、というのは今ここで、ということですか。」

風谷 「うん、正しくは24時を過ぎていたので明日なんだけど、君と僕が出会ったのは今日でこのお店なんだ。」

澤村 「そうなんですね。」

風谷 「しかも、先にいた君から声を掛けてね。」

澤村 「えー!!」

風谷 「それで付き合うことになったんだよ。」

澤村 「ほんとですか?!」

凧谷、楽しそうに微笑んでからまじめな顔をして、

凧谷 「相原さんともこのお店で会った。1年めの命日に、君がおいしいと言っていたジン・バックを作ってもらいたくなってひさしぶりに来たら、先に飲んでいた彼女が声を掛けてきたんだ。」

澤村 「あ。」

凧谷 「うん。なんだか僕たちの時と似てるなあ、と思ってつい話をして、帰りがけに彼女がまた、というのを約束しちゃってね。何回か会っているうちに彼女が言ってくれたんだ、実は1年前に一目惚れしたからこのお店に通い続けて待っていました、って。でも僕はごめん、と断り続けて。結局10年の時が経ってしまった。」

澤村 「それが10年縛るといことだったんですね。」

凧谷 「うん。」

澤村 「・・・ということは、事故を起こした時の相原さんも、わたしが来るとわかっていて爆発物を仕掛けたんですか。」

凧谷 「いや、彼女と僕たちはこの時点では面識はないと思う。君が亡くなって間もなくの頃、笠原さんにもそのことを伝えるに行ったんだけど、おそらく彼女はその時に見かけたんじゃないかな。」

澤村 「そう、ですか・・・。」

凧谷 「彼女は単純に実際の爆発規模を確かめてみたかっただけだと思うよ。篠崎先生も、本当に自分たちが帰った後に帰ると思っていたと思う。誰も巻き込む気はなかった、ということだけは信じてあげてくれないか。」

澤村 「・・・はい。」

澤村、微笑む。

凧谷、それを確認するように微笑んでから、

凧谷 「じゃあ、そろそろ僕は帰ることになるから。」

澤村 「でも、24時を過ぎたらこの時代の凧谷さんがここに来るんですね?」

凧谷 「うーん、12年前の僕、つまり君の時代の僕も、今日の24時になったら1年後へ時間移動をするから。」

澤村 「え?」

凧谷 「笠原さんに、急ぎで優秀な時限爆弾解除をできる人を探している、と言われてね。いろいろな意味でおもしろそうと思ったから引き受けたんだ。だから今、笠原さんといえるかもしれないね。」

澤村 「じゃあ、凧谷さんがいなくなったら、その凧谷さんもない・・・。」

凧谷 「代わりに、というのもなんだけど・・・。」

凧谷、ポケットから箱を出して澤村に差し出す。

澤村、受け取って箱を開く。

澤村 「これって……。」

風谷 「篠崎先生にサインをもらった帰りの食事の時に渡そうと思っていた結婚指輪。君には迷惑だと思っけど、受け取ってください。」

澤村 「……はい。ありがとうございます。」

風谷 「いや、お礼でもあるんだ。このネクタイの。」

澤村 「……風谷さん、これ大事にします。」

風谷 「ありがとう。でも、幸せになるんだよ。」

澤村 「わたし、1年後に風谷さんを見つけます！」

風谷 「ありがとう。でも、それはむずかしいと思うよ。」

澤村 「え？」

風谷 「terminal 288のルールは、未来のことを絶対に話さないこと。話した場合は、お互いがお互いのことを忘れることになる。そして僕には警察庁の人間としての懲罰もある。過去、君にとっての未来は変わるんだ。だから僕らは、まず出会えない。」

澤村 「そんな……。」

風谷 「でも、それで今の君も1年後の君も死ぬことはなくなったんだから。」

笠原、入ってくる。

笠原 「風谷くん、そろそろ。」

風谷 「すみませんでした。」

笠原 「行こうか。」

風谷 「はい。」

笠原、風谷、出て行こうとする。

澤村 「あのー！」

笠原、風谷、立ち止まる。

笠原、風谷を促すようにし、ひとりで出ていく。

澤村 「あの、わたし、たぶん風谷さんのことが好きでした。」

風谷、驚いた顔をするが、微笑んで、

風谷 「咲希は、波留哉って呼んでたよ。」

澤村 「波留哉、さん。……波留哉。」

風谷 「うん。」

澤村 「波留哉、ずっと大好きだから。」

凧谷 「うん。」

澤村 「わたし、波留哉のこと、覚えてなくても絶対見つけるから！」

凧谷 「・・・咲希。」

凧谷、澤村を抱きしめる。

凧谷 「咲希、僕もずっと大好きだから。」

凧谷、出ていく。

澤村、出ていくのを見届け、指輪を見つめてから、椅子に座る。

凧谷、入ってくる。

澤村、目を見張る。

音楽、フェードイン。

凧谷、きよろきよろしながら椅子に座る。

笠原、入ってくる。

笠原 「声掛けないでいいんですか。」

澤村 「え！」

笠原 「よく考えると、わたしには過去の人間の記憶までも操作する権利はないですか
ら。」

澤村 「あ・・・。」

笠原 「あと、凧谷くんには懲罰として、元の時代に帰っていただくことにしました。」

澤村、立ち上がり、凧谷に向かって、

澤村 「あの！ よかったら一緒に飲みませんか？」

凧谷 「え？・・・うん、僕でよかったです。でももう40も過ぎた、こんなおじさんでいいの？」

澤村、うなずく。

凧谷、澤村を隣の席へ促す。

澤村、座る。

凧谷 「それにしてもまさか40過ぎてナンパされるなんてなあ。」

澤村 「違います。約束通り、見つけたんです。」

凧谷 「え？」

澤村 「ちよっとずるしましたけど。」

凧谷、不思議そうな顔をするが笑いだす。
澤村もつられて笑う。

凧谷 「何だろう、なんだかとても懐かしいな。」

澤村 「・・・サイドカーでいいですか。」

凧谷 「え？ ああ、うん。」

澤村 「サイドカー、・・・それと、ジン・バックを。」

笠原、微笑みながらお辞儀をして支度を始める。
澤村、凧谷、見つめ合って微笑み、話し始める。

照明、フェードアウト。

(終)